

地域の子育て資源に関する研究（１） —子育てひろばの機能に関する一考察—

母子保健研究部 斉藤 進

要 約

子育てひろばの機能を明らかにする目的で、子育てひろばの効果とその関係要因を検討した。分析は、「ひろばについての調査」の回答者で、19歳～45歳未満の女性、東京、千葉、埼玉、福井在住の1223人のデータを使用した。子育てひろばの効果は、ひろばの効果を計量するために開発した「ひろば効果尺度」を用い、「行動の外向き化」、「子育て肯定感」、「パートナー意識の醸成」、「子育て安堵感」の下位尺度得点を算出し、親子の属性、子育てサポート環境、性別役割規範等12項目との関係を検討した。その結果、「行動の外向き化」は5項目、「子育て肯定感」は8項目、「パートナー意識の醸成」は4項目、「子育て安堵感」は1項目で有意な差がみられた。これらから、子育てひろばの機能として、①子育てのポジティブ化、②母親のエンパワーメント、③育児ネットワークの構築、の3機能が推察された。あわせて、子育てひろばは、子育て資源として有効であることが示唆された。

キーワード：子育て資源 子育てひろば ひろば効果尺度

Community Childcare Resources (1) — A Discussion of the Functions of Childcare Spaces —

Susumu SAITO

Abstract : The efficacy and related factors of childcare spaces were considered in order to reveal the functions of such centers. The responses of a “Childcare Space Questionnaire” were used for the analysis. The respondents were 1223 women between 19–45 years old and who live in Tokyo, Chiba, Saitama, and Fukui. Using a “childcare space efficacy scale” developed to measure the effects of childcare spaces, subscale scores were calculated for “encouragement of extroverted activity,” “positive feelings toward child-raising,” “growing partner awareness,” and “sense of child-raising reassurance,” and the relationship was considered of these subscale scores with twelve items such as parent/child attributes, child-raising support environment, and gender role norms. A significant difference was observed for five items for “encouragement of extroverted activity,” eight items for “positive feelings toward child-raising,” four items for “growing partner awareness,” and one item for “sense of child-raising reassurance.” Based on these results, three functions of childcare spaces could be inferred: (1) increasing positive thoughts regarding child-raising, (2) empowering mothers, and (3) building childcare networks. These results also suggested that childcare spaces were effective as child-raising resources.

Keywords : childcare resources, childcare spaces, childcare space efficacy scale

I. 目的

「今後の家庭教育支援の充実についての懇談会」(平成14年)で、子育てサポーターの養成と子育てネットワークの形成、子育てサロン型学習の場の重要性とその推進が報告され、同(平成14)年から厚生労働省は、「つどいの広場」事業を開始した¹⁾²⁾³⁾。フリースペースとも呼ばれる「つどいの広場」と「子育てサロン」は、①親の共感・共有性の場であり、②ノンプログラムであることが大きな特徴となっている⁴⁾。少子化対策として、子育てを支援するソフトとして、子育てひろばなどのフリースペースの重要性が一層高まり、「つどいの広場」事業は、平成16(2004)154ヶ所から17年480ヶ所、18年694ヶ所、19年903ヶ所に増加し、子ども・子育て応援プランの目標値は1600ヶ所となっている。この子育てひろば(サロン)の有用性について、親の変化や参加者の特質等から計量化する目的で「ひろば効果尺度」を開発した⁵⁾。この尺度を用いて、参加者の属性、家族内役割、パーソナルネットワークの状況等の要因との関係を検討し、子育て資源として「子育てひろば(サロン)」の機能を検討した。

II. 方法

子育てひろばの効果については、筆者らがファミリーサポート研究会⁶⁾で開発した尺度を用いた。この尺度は尺度開発用に準備した39項目の質問に「あてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の4件法で回答を求め、それぞれ4点～1点を与え因子分析を行い、「行動の外向き化」、「子育て肯定感」、「パートナー意識の醸成」、「子育て安堵感」、「自分自身の不安感」の5因子を抽出した。クロンバックの α 係数から信頼性を検討した結果、信頼性が低い「自分自身の不安感」を除いた4因子が下位尺度として使用可能であった⁶⁾。下位尺度の質問項目は表1のとおりである。下位尺度得点は、平均点を算出し用いた。

解析に使用したデータは、2007年6月～2008年3月にファミリーサポート研究会が実施し、尺度開発に使用した「ひろばについての調査」データ⁷⁾から、年齢不明を除いた19歳～45歳未満の女性で東京、千葉、埼玉、福井在住の1223人の回答を用いた。

検討した関連項目は、①利用者の属性として「母親の年齢」、「第1子の年齢と性別」、「きょうだいの状況」、②サポート環境として「近所づきあいの状況」、「頼れる人の状況」、③性別役割として「性別役割分業(男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである)」、「女性の育児責任(子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たずに育児に専念すべきだ)」、「男性の稼得責任(家族を経済的に養うのは男性の役割だ)」を用いた⁸⁾。また、この3つの性別役割観の「そう思う」から「そう思わない」を1点から4点として合計した得点を「家族内性別役割規範度」

として算出した。

ひろば効果尺度得点の順位についてはウィルコクソンの符号付順位検定を、関連性については関連項目の各水準のひろば効果尺度得点の差についてクラスカル・ウォリスの検定およびマン・ホイットニーのU検定を行った。統計ソフトは、SPSS 1.40J for Windowsを使用した。

III. 結果

1. ひろば効果尺度得点

ひろば効果尺度得点は、「子育て肯定感」3.17(SD 0.57)、「子育て安堵感」2.91(SD 0.70)、「パートナー意識の醸成」2.72(SD 0.82)、「行動の外向き化」2.47(SD 0.63)の順で、その各順位間には有意($p < .001$)に差が見られた(表2)。

2. 関連項目

回答者の属性は、東京(61.2%)、福井(21.1%)、千葉(17.7%)の順で、東京が半数以上を占めている(表3)。年齢は、「30～34歳」(44.2%)が最も高く、次いで「35～39歳」(24.2%)、「25～29歳」(22.8%)で(表4)、仕事の状況については「専業主婦/無職」(78.4%)が8割を占めていた(表5)。子どもの年齢は、「1～2歳未満」(40.1%)が最も高く(表6)、子どもの性別は男女同比率で(表7)、「初めての子」(71.9%)が8割を占めていた(表8)。

サポート環境として、近所づきあいの状況は、「5人以上」(36.4%)が高く、次いで「2人」(20.7%)、「3人」(18.1%)であった(表9)。頼れる人の状況も同様に「5人以上」(28.1%)が高く、「2人」(26.3%)、「3人」(21.5%)であった(表10)。

性別役割観として、「性別役割分業(男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである)」は、「どちらかといえばそう思う」(35.9%)が高く、「どちらかといえばそう思わない」(31.3%)、「そう思わない」(30.1%)も同様な比率となっていた(表11)。「女性の育児責任(子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たずに育児に専念すべきだ)」では、「どちらかといえばそう思う」(50.7%)が高く半分を占め、「男性の稼得責任(家族を経済的に養うのは男性の役割だ)」でも「どちらかといえばそう思う」(43.8%)が高く、5割弱となっていた(表12、13)。「家族内性別役割規範度」は、「6～7点」(35.6%)が高かった(表14)。

3. ひろば効果得点と関係要因

関係要因の各水準とひろば効果尺度の得点の差の検定結果を表16に示した。回答者属性で有意な差が見られたのは、地域(都県)と「子育て肯定感」($p < .05$)と「パートナー意識の醸成」($p < .001$)に、年齢では「行動の外向き化」($p < .01$)と「子育て肯定感」($p < .001$)に、

仕事では「子育て肯定感」($p < .01$)に見られた。また、年齢の各水準におけるひろば効果得点は、年齢が高いグループになると低下する傾向が「行動の外向き化」と「子育て肯定感」に見られた(図1)。

子どもの年齢では「行動の外向き化」($p < .01$)と「子育て肯定感」($p < .001$)、「パートナー意識の醸成」($p < .01$)に、きょうだいの状況では「子育て肯定感」($p < .001$)と「パートナー意識の醸成」($p < .001$)に有意な差が見られた。しかし、子どもの性別では有意な差が見られなかった。また、子どもの年齢においても年齢が高いグループになると母親と同様にひろば効果得点が低下する傾向が見られた(図2)。

サポート環境としての「近所づきあいの人数」では「行動の外向き化」($p < .001$)に、「頼れる人の数」では「行動の外向き化」($p < .001$)と「子育て肯定感」($p < .001$)、「パートナー意識の醸成」($p < .05$)、「子育て安堵感」($p < .01$)のすべてに有意差が見られた。

「頼れる人の数」ではすべてのひろば効果領域において、頼れる人の人数が多い群ほど得点が高くなる傾向を示していた(図3)。

性別役割の「性別役割分業」では「子育て肯定感」($p < .01$)に、「女性の育児責任」では「行動の外向き化」($p < .05$)と「子育て肯定感」($p < .05$)に有意な差が見られたが、「男性の稼得責任」と「家族内性役割規範度」では有意な差は見られなかった。

ひろば効果の4つの下位尺度で有意な差が見られた項目は「頼れる人の状況(人数)」であったが、子育て安堵感を除いた3つの下位尺度では「第一子の年齢」で有意な差が見られた。2つの下位尺度では、地域と母親の年齢、きょうだいの状況、女性の育児責任であった。また、子育て肯定感11項目中8項目に、行動の外向き化では5項目に有意な差が見られた。

IV. 考察

1. ポジティブな子育てへ

「子育て肯定感」は、「子育てがますます楽しくなった」、「子どもの成長の見通しをもてるようになった」、「安心して子育てができるようになった」、「もう1人子どもを産んでもいいなと感じた」で構成されている。この「子育て肯定感」は、地域間と母親の年齢、仕事の状況、子どもの年齢、初めての子かどうか、頼れる人の状況、女性の育児責任で有意な差がみられた。また母親の年齢では、若いほど平均点が高い傾向がみられ、頼れる人の数が増えるほど高くなる傾向がみられた。

少子化対策の視点でみると、これらから子育てをする意欲を高めるためには多様な要因が関係していることが確認できる。特に母親の年齢では若い時に高得点を示していることから、若い世代に子育てひろばの存在が有効であると推測され、また子どもの年齢も同傾向を示して

いることから育児に不慣れな母親へのひろばの有効性を支持するデータと考えられる。従って、早期に子育てひろば等への参加を可能にする体制整備や広報等が必要と考えられる。

ひろば効果の「子育て安堵感」に着目すると、頼れる人の数が増えると高まる傾向みられた。従って、仲間づくりの視点だけでなく、信頼関係を構築し、相談にのることができるスタッフの存在が重要と考えられる。

次に、「パートナー意識の醸成」では第1子の年齢と初めての子、頼れる人の状況に差がみられたことから、子育てに不慣れな母親にとって、パートナーとのコミュニケーションを活性化させる機会となっていることが推測される。父親の育児への関わりは、未就学児をもつ父親の場合1日31分と報告されており⁹⁾、父親が十分な母親の精神的な支えになっているかどうか疑問であるという報告¹⁰⁾もある。父親の子育てへの関わりは少ないのが現状であるが、子育てひろばに母親が参加することによって、パートナー意識の醸成がすすみ、母親の相談相手や育児への関わりが増幅されることを本調査結果は示唆している。

2. 母親のエンパワーメント

「行動の外向き化」は、「自分の子育て経験がほかの人に喜ばれた」「自分もひろばの中で手伝いをするようになった」「地域の方々とふれあいができた」等で構成されており、その内容から母親のエンパワーメントを高める領域と考えられる。自分の子育て中心から地域への視点が加わり、地域での居場所ややりがいができるなどコミュニティづくりに通ずるものである。子どもの年齢と近所づきあい、頼れる人の状況の良好化により高まる傾向を示しており、子育てから地域社会に目を向ける機会となっている。従って、子育てだけの生活から、ひろば運営や地域活動へと自己実現を可能とするきっかけとなるようにコミュニケーション能力や社会性を付与することが大切である。子育てひろばが生涯学習の場であり、それを越えた地域活動の可能性を秘めていることを意識して、運営することが必要であろう。

3. 子育てを支えるネットワークづくり

頼れる人の状況は、「行動の外向き化」、「子育て肯定感」、「パートナー意識の醸成」、「子育て安堵感」の4つの下位尺度すべてに関連があり、重要な要素となっている。「育児不安度を左右するのは、就労形態や世帯年収等の属性よりも、育児ネットワークの状態である」¹¹⁾ことから、頼れる人の状況や近所づきあいの状況は子育て不安の解消に重要な役割を持っている。

本研究において、近所づきあいについては関連性を認められなかったが、頼れる人の状況が、ひろばの効果に関連していることが明らかになっている。特に「子育て肯定感」や「子育て安堵感」に大きな影響を与えると考

えられることから、「子育てひろば」においては、「子育てひろば」関係者が頼れる人になることや頼れる人のネットワークづくりを支援することが、重要な役割であると考えられる。

「子育てひろば」では、母親の相談にのるなどの信頼関係を構築するとともに、親族や頼れるネットワークをはじめ、子育ての仲間づくりなどの構築を支援することが求められる。

V. 結論

子育てひろばの効果を検討した結果、子育てひろばの機能として、①子育てのポジティブ化、②母親のエンパワメント、③育児ネットワークの構築を挙げた。

本研究は限定された対象のデータであり、十分な分析とはいえないが、対象となった「子育てひろば」は子育て支援に有効であることを示しているといえる。

謝辞：本調査研究にご協力をいただいたファミリーサポート研究会、および関係者の皆様に感謝します。

【文献】

- 1) 内閣府編、平成 16 年版少子化白書、2004
- 2) 今後の家庭教育支援の充実についての懇談会、社会の宝として子どもを育てよう！～今後の家庭教育支援の充実についての懇談会報告のポイント～、平成 14 年 7 月
- 3) 内閣府編、平成 20 年版少子化白書、2008
- 4) 斉藤進他、子育て支援に関わる地域組織活動の育成支援のあり方、平成 15 年度厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究事業）地域における子育て支援ネットワークの構築に関する研究（主任研究者 中村敏）研究報告書、2004、pp217-223
- 5) 福川須美、「子育てひろばの効果に関する調査研究の試み」、生協総合研究所編、『生協総研レポート 59「子育てひろば」の効果測定』、2009、pp. 4～6
- 6) 斉藤進、「子育てひろば(サロン)の効果測定」、生協総合研究所編、『生協総研レポート 59「子育てひろば」の効果測定』、2009、pp. 11～19
- 7) 近本聡子、「調査概要と回答者のプロフィール」、生協総合研究所編、『生協総研レポート 59「子育てひろば」の効果測定』、2009、pp. 7～10
- 8) 嶋崎尚子、「家族に関する意識」、日本家族社会学会・全国家族調査委員会編、『第 2 回家族についての全国調査（NFRJ03）第一次報告書』、2005、pp. 175～192
- 9) 総務省、平成 18 年社会生活基本調査
- 10) 日本小児保健協会、「両親の心身の健康状態と育児との関わり」、『平成 12 年度用事健康度調査報告書』、2001、pp. 24～26
- 11) 松田茂樹、「育児ネットワークの再生」、『何が育児を支えているのか』、勁草書房、2008、pp. 157～183

表1 「ひろば」効果尺度の質問項目

1. 行動の外向き化

- 自分の子育て経験がほかの人に喜ばれた (Q36)
 自分もひろばの中で手伝いをするようになった (Q33)
 栄養のバランスなど食生活に気を配るようになった (Q35)
 友人をひろばや地域のイベントなどに誘うようになった (Q34)
 地域の方々とのふれあいができた (Q37)

2. 子育て肯定感

- 子育てがますます楽しくなった (Q9)
 子どもの成長の見通しをもてるようになった (Q10)
 安心して子育てができるようになった (Q6)
 もう 1 人子どもを産んでもいいなと感じた (Q21)

3. パートナー意識の醸成

- パートナー(夫/妻)も ひろばに関心をもつようになった (Q31)
 パートナー(夫/妻)をひろばに連れてきたいと思った(すでに来た) (Q30)
 パートナー(夫/妻)との会話がはずむようになった (Q32)

4. 子育て安堵感

- 自分の相談相手ができた (Q28)
 ほかの親にも同じ悩みがあると知り安心できた (Q14)
 少し大きいお子さんを持っている親にいろいろ聞いたりできた (Q25)

表2 ひろば効果尺度得点

	度数	平均値	標準偏差
行動の外向き化	1155	2.47	0.63
子育て肯定感	1202	3.17	0.57
パートナー意識の醸成	1136	2.72	0.82
子育て安堵感	1192	2.91	0.70

表4 年齢(5歳階級)

	度数	パーセント
25歳未満	47	3.8
25～29歳	279	22.8
30～34歳	540	44.2
35～39歳	296	24.2
40～44歳	61	5.0
合計	1223	100.0

表6 第一子年齢(1歳階級)

	度数	パーセント
1歳未満	252	21.2
1～2歳未満	478	40.1
2～3歳未満	260	21.8
3～4歳未満	154	12.9
4歳以上	47	3.9
合計	1191	100.0

NA=32を除く

表8 きょうだいの状況

	度数	パーセント
初めての子	799	71.9
きょうだいあり	313	28.1
合計	1112	100

NA=111を除く

表9 近所づきあいの状況(人数)

	度数	パーセント
0人	104	8.7
1人	99	8.3
2人	248	20.7
3人	217	18.1
4人	94	7.8
5人以上	437	36.4
合計	1199	100.0

NA=24を除く

表11 性別役割分業(男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである)

	度数	パーセント
1.そう思う	32	2.6
2.どちらかといえばそう思う	437	35.9
3.どちらかといえばそう思わない	381	31.3
4.そう思わない	366	30.1
合計	1216	100.0

NA=7を除く

表13 女性の育児責任(子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たずに育児に専念すべきだ)

	度数	パーセント
1.そう思う	142	11.7
2.どちらかといえばそう思う	532	43.8
3.どちらかといえばそう思わない	279	22.9
4.そう思わない	263	21.6
合計	1216	100.0

NA=7を除く

表3 都県別

	度数	パーセント
千葉	216	17.7
東京	749	61.2
福井	258	21.1
合計	1223	100.0

表5 仕事

	度数	パーセント
1.フルタイム	131	11.8
2.パート・バイト	69	6.2
3.専業主婦/無職	872	78.4
4.その他	40	3.6
合計	1112	100.0

NA=111を除く

表7 第一子性別

	度数	パーセント
男性	595	51.6
女性	557	48.4
合計	1152	100.0

NA=71を除く

表10 頼れる人の状況(人数)

	度数	パーセント
0人	69	5.8
1人	115	9.7
2人	313	26.3
3人	255	21.5
4人	102	8.6
5人以上	334	28.1
合計	1188	100.0

NA=35を除く

表12 男性の稼得責任(家族を経済的に養うのは男性の役割だ)

	度数	パーセント
1.そう思う	111	9.1
2.どちらかといえばそう思う	616	50.7
3.どちらかといえばそう思わない	238	19.6
4.そう思わない	250	20.6
合計	1215	100.0

NA=8を除く

表14 家族内性役割規範度

	度数	パーセント
5点以下(保守的)	132	10.9
6～7点	430	35.6
8～9点	330	27.3
10点以上	315	26.1
合計	1207	100.0

NA=16を除く

表16 子育て環境等とひろば効果尺度との検定結果

	行動の外向き化	子育て肯定感	パートナー意識の醸成	子育て安堵感
地域(都県)	ns	*	***	ns
母親の年齢(5歳階級)	**	***	ns	ns
母親の仕事	ns	**	ns	ns
第一子年齢(1歳階級)	**	***	**	ns
第一子性別※	ns	ns	ns	ns
きょうだいの状況(初めての子、きょうだいあり)※	ns	***	***	ns
近所づきあいの状況(人数)	***	ns	ns	ns
頼れる人の状況(人数)	***	***	*	**
性別役割分業(男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである)	ns	**	ns	ns
男性の稼得責任(家族を経済的に養うのは男性の役割だ)	ns	ns	ns	ns
女性の育児責任(子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たずに育児に専念すべきだ)	*	*	ns	ns
家族内性別役割規範度(4グループ)	ns	ns	ns	ns

注: クラスカル・ウォリスの検定、※印はマン・ホイットニーのU検定

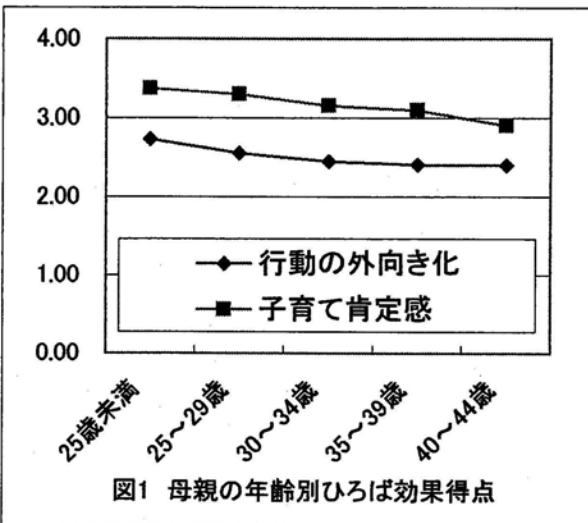


図1 母親の年齢別ひろば効果得点

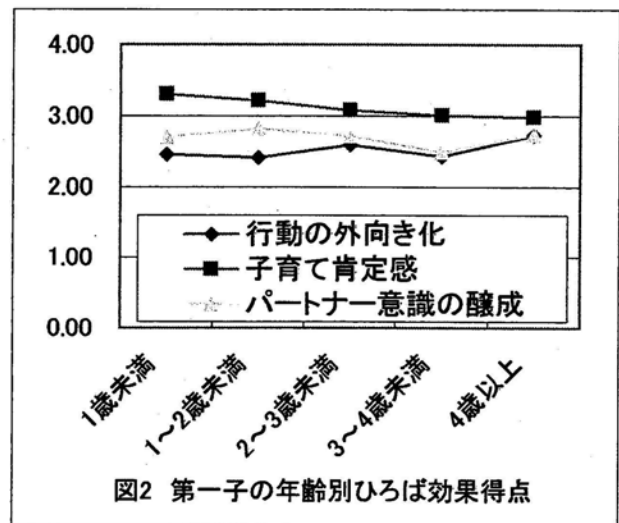


図2 第一子の年齢別ひろば効果得点

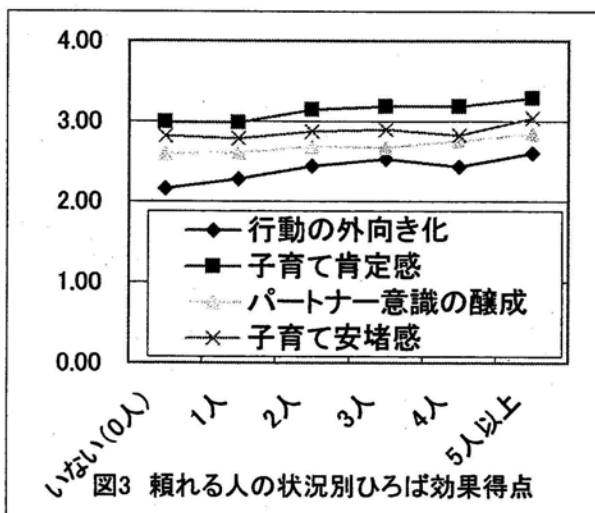


図3 頼れる人の状況別ひろば効果得点